みささぎ
奈良大学図書館報
第11号
2011. 7

社会調査を学ぶための基礎資料
－新たに収集した国勢調査関連資料について－

社会学部社会調査学科 准教授　芹　澤　知　広

日本初の社会調査学科が奈良大学に誕生し、社会調査学科の第１期生を受け入れたのは昨年、平成22年である。奇しくもこの年は、2010年という、西暦では末尾の数字が零になる年にあたり、代表的な社会調査である「国勢調査」が実施された。

社会調査とは社会現象を正確に把握するための科学的な手法であり、さまざまな方法、さまざまな種類の社会調査が現在行われ、私たちの生活をよりよくするために活用されている。そのなかで、日本の政府が主体となり、日本の全世帯を調査対象にして実施する人口調査（センサス）としての「国勢調査」は、規模の大きい特別なものである。

大阪市の国勢調査のポスター

世界各国の比較を目的に、末尾が零になる年に各国で一斉に人口調査を行うというアイデアは、「国際統計協会」によって19世紀後半にはすでに出されていたが、日本で初めて国勢調査が実施されたのは、1920年（大正９年）であった。明治維新以降、欧米列強を意識しながら近代的な社会制度を急速に導入し、同時に、領土の拡張とともに統治能力を試されていた当時の日本の指導層が、帝国の全世帯を対象とする国勢調査の実施に大きな決意をもって取り組んだことを想像するのはむずかしくない。

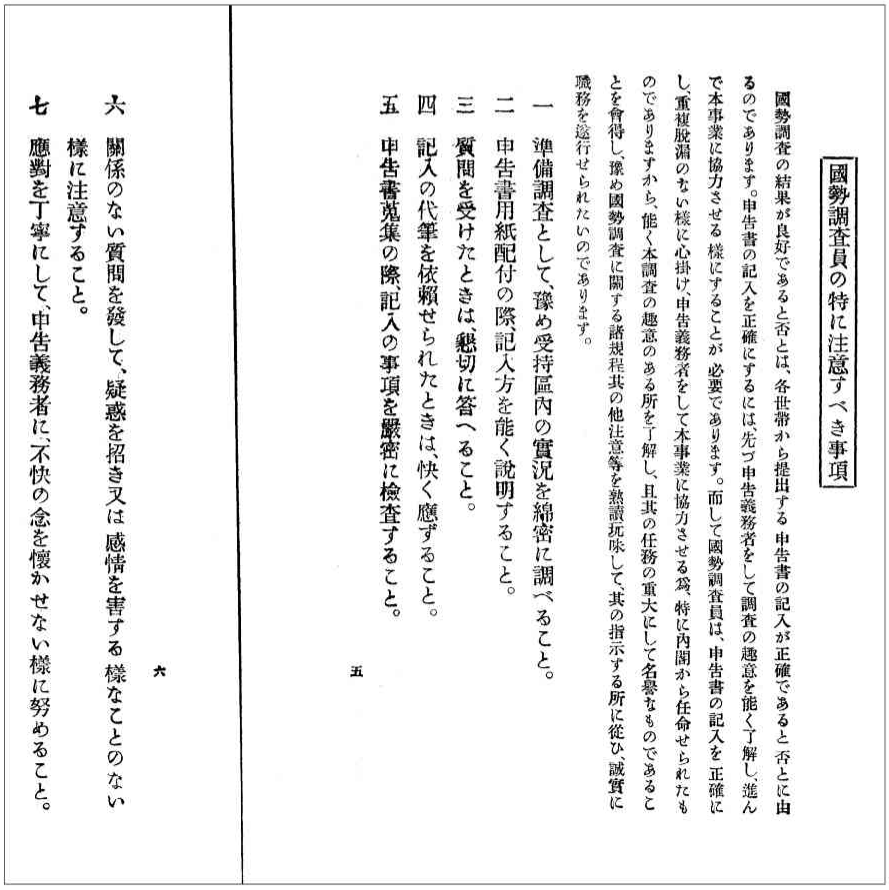
この日本の社会調査の草創期を実感でき、日本を代表する社会調査である国勢調査の方法と歴史についての理解を深めるための教材として、社会調査学科では国勢調査関連の歴史資料を集めることを発案した。そして古書籍商の目録等を通じて国勢調査関連資料を探し、平成22年度の奈良大学図書館予算から12点を購入した。なお、ここで付言するが、開学以

来、日本有数の地理学科を擁し、人口をはじめとする社会現象の計量的データを扱った研究を積極的に行ってきた本学では、国勢調査についての書籍をすでに多く所蔵している。例えば、歴史研究に関わる文献としては、「外地国勢調査報告」という文生書院の復刻シリーズがある。

岐阜県羽島郡堀津村における第１回国勢調査担当者の集合写真。
『日本国勢調査記念録　岐阜県第三巻』 から。

1920年（大正９年）の第１回国勢調査では、各県ごとに『日本国勢調査記念録』という３冊１セットの記念誌がつくられている。そのなかから、岐阜県と福岡県のセットを今回購入した。３冊のうち第一巻と第二巻は各県共通であるが、第三巻はそれぞれの県に固有の内容をもつ。例えば岐阜県では、「日本国勢調査記念出版協会」の役員の名前があげられた後に、「岐阜県国勢調査係員」の名前があげられ、調査係となった各市各郡の役員の名前があがっている。そして、その後の頁では、町村単位で調査員の記念写真が載せられている。町村の役員たち（男性で、多くは「羽織はかま」の和装をしている）が役場の前に厳かに並んだ記念写真からは、当時の人々にとって国勢調査がきわめて重要な公務であったことを見てとることができる。

また記念写真に写った国勢調査を宣伝するポスターには、「有りのままを申告すること」「一人も申告に漏れぬこと」という広告文があり、データの正確を期す意気込みが伝わってくる。



國勢調査員の特に注意すべき事項

國勢調査の結果が良好であると否とは、各世帯から提出する申告書の記入が正確であると否とに由るのであります。申告書の記入を正確にするには、先づ申告義務者をして調査の趣意を能く了解し、進んで本事業に協力させる樣にすることが必要であります。而して國勢調査員は、申告書の記入を正確にし、重複脱漏のない樣に心掛け、申告義務者をして本事業に協力させる爲、特に内閣から任命せられたものでありますから、能く本調査の趣意のある所を了解し、且其の任務の重大にして名譽なものであることを會得し、豫め國勢調査に關する諸規程其の他注意等を熟讀玩味して、其の指示する所に從ひ、誠實に職務を遂行せられたいのであります。

一　準備調査として、豫め受持區内の實況を綿密に調べること。
二　申告書用紙配付の際記入方を能く説明すること。
三　質問を受けたときは、懇切に答へること。
四　記入の代筆を依頼せられたときは、快く應ずること。
五　申告書蒐集の際、記入の事項を嚴密に檢査すること。

六　關係のない質問を發して、疑惑を招き又は感情を害する樣なことのない樣に注意すること。
七　應對を丁寧にして、申告義務者に、不快の念を懷かせない樣に努めること。

『大正十四年国勢調査従事員必携』５－６頁。

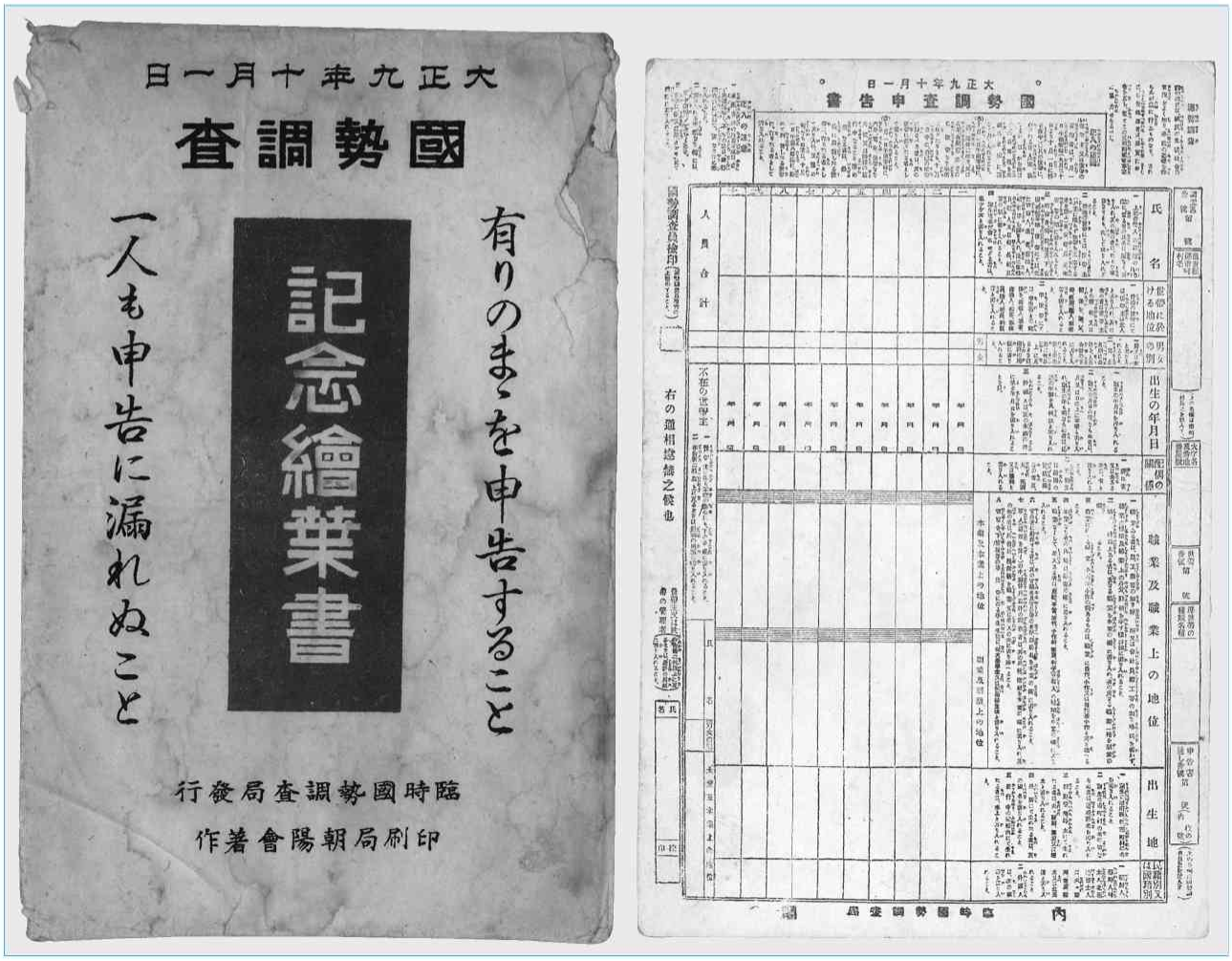
今回収集した資料にもポスターが１枚あり（前頁参照）、「一人の嘘は萬人の實を殺す」という広告文になっている。「大阪市役所」の文字があり、大阪市が独自に作成したポスターであることはわかるが、どの年のものかは今のところ不明である。第１回国勢調査ではなく、その後の昭和時代の国勢調査に関するものかもしれない。

1920年（大正９年）の次には、1925年（大正14年）に国勢調査が行われたが、その時の調査員マニュアルにあたる『大正十四年国勢調査従事員必携』（内閣統計局発行）は、社会調査の方法を考えるうえでとても興味深い。「国勢調査員の特に注意すべき事項」には、「質問を受けたときは、懇切に答へること。」

「関係のない質問を発して、疑惑を招き又は感情を害する様なことのない様に注意すること。」など、箇条書きで７つあげられていて、今日にも通じる具体的なアドバイスも多い。

そのほか、今回は国勢調査に関係する戦前の葉書類を購入した。第１回国勢調査の記念葉書は３枚セットで、１枚は当時の「国勢調査申告書」が図柄になっている。第１回国勢調査については、その記念切手が貼られた「朝鮮総督府始政十周年紀〔ママ〕念」の記念の消印がついた絵葉書も収集した。1935年（昭和10年）の国勢調査記念の消印がある葉書セットは、東京のほか、台北、大連、京城、豊原、という植民地の都市の消印が押されている。また、日本の領土ではないため日本の国勢調査ではないが、「新京」「康徳七年十月一日」の文字が入った消印の付いた、「満洲国」が1940年（昭和15年）に行った「臨時国勢調査」についての葉書も収集した。

昨年2010年（平成22年）の国勢調査では、調査票の封入提出や、郵送による調査票提出、インターネットによる回答の試行などが導入され、地元の世話役が誇りと責任をもって調査票を集めていた戦前の時代とは、今や大きく様変わりをしている。また、とても残念なことだが、日本では多くの人々に社会調査の意義が未だ十分に認められていないため、国勢調査への回答を拒むような人々さえも現れているらしい。データを正確に集め、そのデータに基づいた確かな議論を積み重ねるということは、私たちがよりよい社会生活を送るために、日々必要とされている技術である。国勢調査の方法と歴史を学ぶことから、社会調査の意義についての理解を深めることは、大学生にとって有益であろう。関連資料の継続的な収集と、本学の教育研究における今後の積極的な活用が期待される。

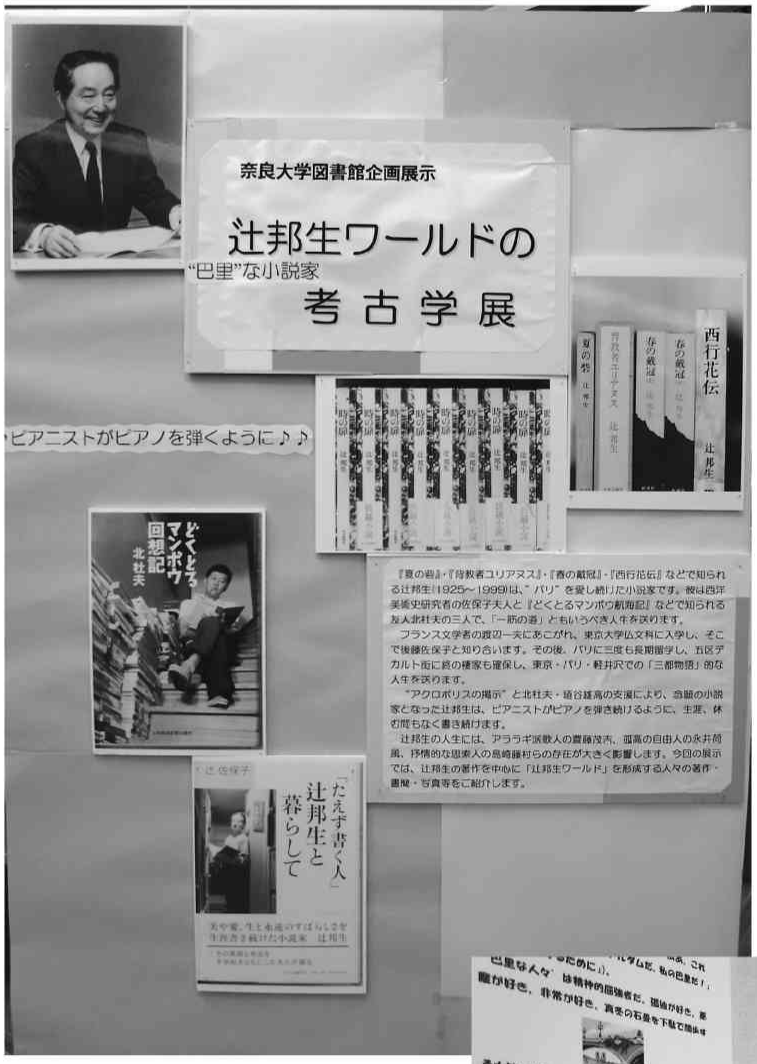


第１回国勢調査記念絵葉書。左は葉書が入っていた封筒、右は葉書の１枚。
国勢調査の調査票が縮小印刷されている。

＋巴里な小説家＋

辻邦生ワールドの考古学展
～ピアニストがピアノを弾くように～

文学部文化財学科 教授　酒　井　龍　一



楽しい展示の案内板

『夏の砦』・『背教者ユリアヌス』・『春の戴冠』・『西行花伝』などで知られる辻邦生（1925～1999）は、〝巴里〟を愛し続けた小説家です。彼は西洋美術史研究者の佐保子夫人と『どくとるマンボウ航海記』などで知られる友人北杜夫の三人で、「一筋の道」ともいうべき人生を送ります。

信州に憧れ入学した旧制松本高校で生涯の友となる北杜夫と知り合います。フランス文学者の渡辺一夫にあこがれ、東京大学仏文科に独語と英語で受験し入学、そこで後藤佐保子（美術史）と出逢います。その後、パリに三度も長期留学。パンテオン裏の五区デカルト街に終の棲家も確保し、東京・パリ・軽井沢での「三都物語」的な人生を送ります。〝アクロポリスの掲示〟と北杜夫・埴谷雄高の支援により、念願の小説家となった辻邦生は、ピアニストがピアノを弾き続けるように、生涯、休む間もなく書き続けます。「人間精神の純粋美」が主題です。

辻邦生の人生には、アララギ派歌人の齋藤茂吉、孤高の自由人の永井荷風、抒情的な思索人の島崎藤村らの存在が大きく影響します。

今回の展示では、辻邦生の著作を中心に「辻邦生ワールド」を形成する人々の著作・書簡・写真等をご紹介します。
※辻邦生ワールドを形成するのは次の人々です。

辻邦生・辻佐保子・北杜夫・斎藤茂吉・永井荷風・島崎藤村・森有正・埴谷雄高・渡辺一夫、中村真一郎・加賀乙彦・平岡篤頼・菅野昭正・粟津則雄・篠田一士・磯崎新・宮脇愛子・丸谷才一・開高健・井上靖・宇野千代・遠藤周作・なだいなだ・安原顯・小泉淳作・福本章・山本容子・栃折久美子・白井晟一・杉山正樹・佐々木涇・三木サニア・林芙美子・木村潔・戸塚真弓・水村美苗・加藤周一…

辻邦生を中心に関係者の著作を展示いたします。辻邦生・北杜夫の生原稿・書簡・著名本・謹呈本・受領本に注目。パリの写真・茂吉の歌集・荷風の稀書・藤村の詩集、天才編集者〝ヤスケン〟と魅力的な山本容子の本も展示しています。

辻邦生の自筆原稿も展示

『春の戴冠』：起死回生
「廻廊にて」以降、『夏の砦』・『安土往還記』・『嵯峨野明月記』・『天草の雅歌』・『背教者ユリアヌス』など、ピアニストがピアノを弾くように苦闘しながら長編小説を書き続け大いに評価を得てきた。こうした時、最新作の『真昼の海への旅』に対して加賀乙彦からの厳しい批評が文芸雑誌「海」（1975年11月号）に掲載された。後日、加賀の期待どおり、念願であったフィレンツェを舞台とする大作『春の戴冠』（1977年）が刊行された。

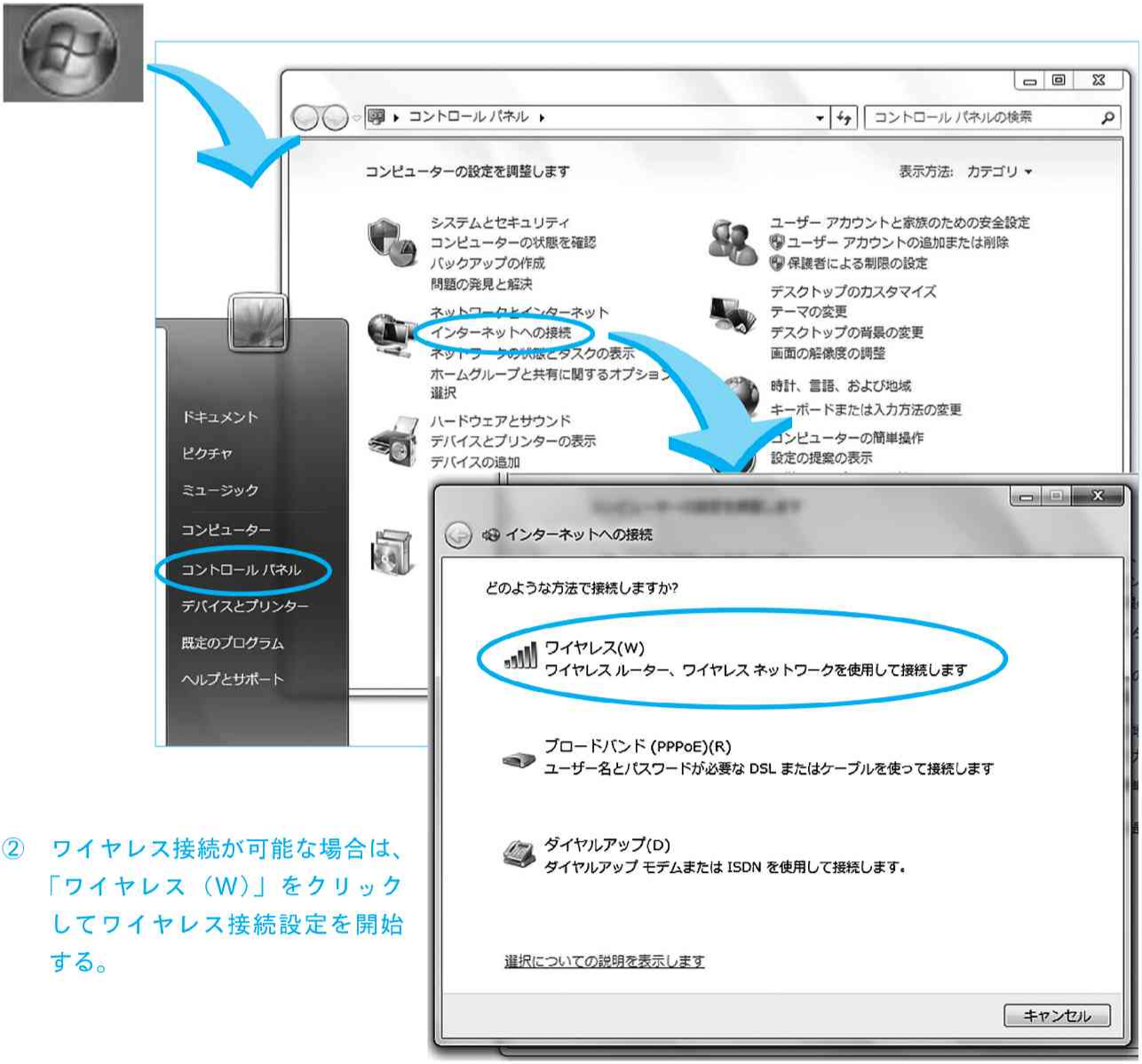
『西行花伝』：構想30年
書きだしてからも文字どおり重い荷を担ぐ思いをした。西行の内面の成熟と、摂関政治から武家支配に変わってゆく時代の崩壊過程とを、焦点の深いレンズで一挙に撮影するのに似た手法で書きたかった（辻邦生）。『西行花伝』が長い執筆活動の究極の到達点を示す作品になったことを、今は心から「これでよかった」と思っている（辻佐保子）。

図書館内　無線ＬＡＮの利用について

図書館では2009年４月から館内に無線ＬＡＮを導入しています。近年、ノートパソコンも高性能低価格のものが多数発売され、図書館利用の方のノートパソコンの持ち込みも増えておりますので、無線ＬＡＮの接続方法について、最新の Windows 7 での接続方法をご紹介いたします。図書館の無線ＬＡＮは学内ネットワークへの接続ではありませんが、インターネットを利用した情報収集には十分に活用できます。

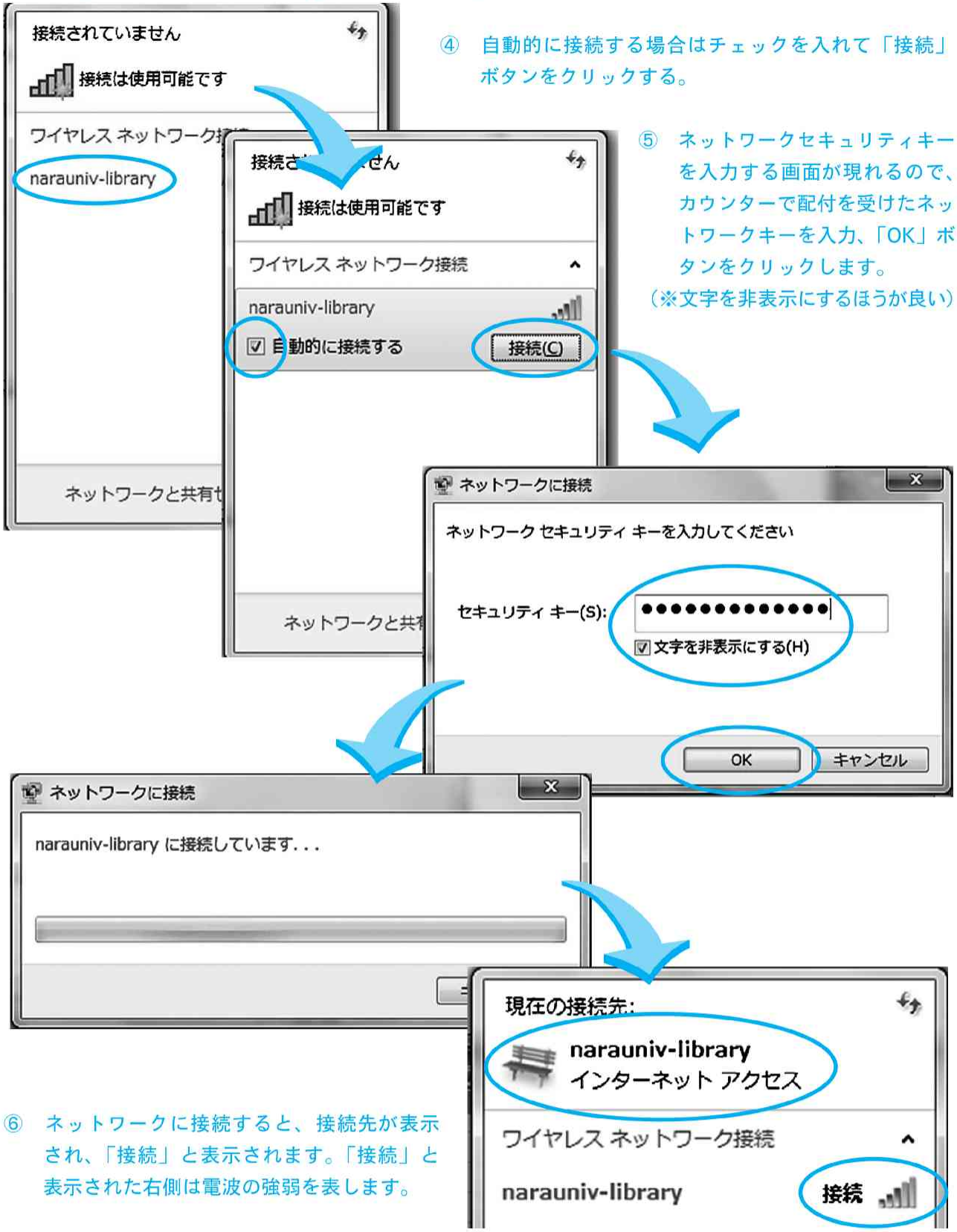
利用には無線ＬＡＮに対応したノートパソコンとネットワークキーが必要です。ネットワークキーはカウンターでメモを配付していますので、カウンターまで申し出てください。

① 標準では右下 Windows のスタートボタンから、「コントロールパネル」→「インターネットへの接続」をクリックして「インターネットの接続」画面を表示させる。



② ワイヤレス接続が可能な場合は、「ワイヤレス（W)」をクリックしてワイヤレス接続設定を開始する。

③　右下に新たにウインドウが現れ、図書館無線ＬＡＮが利用可能であれば「narauniv-library」と表示される。ので、「narauniv-library」をクリックする。



④　自動的に接続する場合はチェックを入れて「接続」ボタンをクリックする。

⑤　ネットワークセキュリティキーを入力する画面が現れるので、カウンターで配付を受けたネットワークキーを入力、「OK」ボタンをクリックします。
（※文字を非表示にするほうが良い）

⑥　ネットワークに接続すると、接続先が表示され、「接続」と表示されます。「接続」と表示された右側は電波の強弱を表します。

以上、最短の手順をメモいたしましたが、詳細は図書館ホームページ上のマニュアル等を参照してください。不明な点等はカウンターまで申し出てください。みなさまのご利用をお待ちしております。

図書館統計　＜2011年３月末現在＞

	平成21年度（2009）	平成22年度（2010）	増　減
開館日数	276	269	▲　7
入館者数	135,138	137,055	1,917
図書所蔵数	406,735	418,940	12,205
（和）	367,256	379,154	11,898
（洋）	39,497	39,786	289
雑誌タイトル数	5,878	6,087	209
貸出総数	49,461	49,032	▲　429
相互協力利用（依頼数）	625	566	▲　59
相互協力利用（受付数）	1,330	1,228	▲　102

■開館日数・貸出総数について

開館日数は、図書館内の図書所蔵資料燻蒸などで、前年度より７日減の269日であったが、入館者総数は、学部生・院生・通信生の利用はもとより、大学行事による、一般の方々の利用も多く、1,917名の増加となりました。貸出総数は、前年度より429冊少ない、49,032冊の貸出利用となりました。

■所蔵資料数について

重点的に受け入れている都道府県史・市町村史誌、奈良関係資料の更なる充実をはかり、図書所蔵数は12,205冊増加、雑誌所蔵は209タイトル増加と所蔵資料数は増加しています。図書蔵書数だけでも41万８千冊を突破し、書架収納スペースの問題も生じてきています。

～地方史誌～

後　記

「みささぎ」第11号をお届けいたします。まず、原稿をご執筆頂きました社会学部社会調査学科芹澤知広先生、図書館展示にご協力いただきました文学部文化財学科　酒井龍一先生には心よりお礼申し上げます。当館は規模こそ大きな図書館ではありませんが、資料蔵書数を年々充実させ、多くのみなさまにご利用頂いております。今後も、学生のみなさまからの要望等に応えて資料の充実を図っていきます。今年度につきましては、今回の11号に続き、12・13号（11月・来年３月予定）を発刊させていただく予定です。（編集担当）

発行：2011（平成23）年７月１日
編集：奈良大学図書館
〒631－8502　奈良市山陵町１５００